

## 谷崎潤一郎の吉野葛

若い頃に花柳界に居た母のイメージを重ねて語られる「義経千本桜」の初音の鼓と忠信狐の伝説、吉野の自然の中に眠る後南朝の悲劇、谷崎の「吉野葛」に描かれている吉野の風土と伝承は、おそらく吉野を描いた最高の案内書。その中から幾つかのエピソードを借りて、深い闇に漂う吉野の歴史の旅に出かけてみましょう。



**南朝様** いったい吉野の山奥から熊野へかけた地方には、交通の不便なために古い伝説や由緒ある家筋の長く存続しているものが珍しくない。たとえば後醍醐天皇が一時行在所にお充てになった穴生<sup>あのお</sup>の堀氏の館など、昔のままの建物の一部が現存するばかりでなく、子孫が今にその家に住んでいると云う。それから太平記の大塔宮熊野落ちの条下に出て来る竹原八郎の一族、 - - 宮はこの家にしばらくご滞在になり、同家の娘との間に王子<sup>みこ</sup>をさえ儲けていらっしゃるのだが、その竹原氏の子孫も栄えているのである。その外更に古いところでは大台ヶ原の山中にある五鬼継<sup>ごきつぐ</sup>の部落、 - - 土地の人はあれは鬼の子孫だと云って、決してその部落とは婚姻を結ばず、彼等の方でも自分の部落以外とは結ぶことを欲しない。そして自分たちは役の行者の前鬼の後裔だと称している。すべてがそんな土地柄であるから、南朝の宮方にお仕え申した郷土の血統、「筋目の者」と呼ばれる旧家は数多くあって、現に柏木の附近では毎年二月五日に「南朝様」をお祭り申し、將軍の宮の御所跡である神の谷の金剛寺において厳かな朝拝の式を挙げる。その当日は数十軒の「筋目の者」たちは、十六の菊のご紋章の附いた袴<sup>はかま</sup>を着ることを許され、知事代理や郡長等の上席に就くのである。

**狐** これは多分、しばしば祖母に連れられて文楽座や堀江座の人形芝居へ行ったものだから、そんな時に見た葛の葉の子別れの場が頭に沁み込んでいたせいであろう。あの、母狐が秋の夕ぐれに障子の中で機<sup>はた</sup>を織っている、とんからり、とんからりと云う箴<sup>おさ</sup>の音。それから寝ている我が子に名残りを惜しみつつ「恋いしくば訪ね来てみよ和泉なる - - 」と障子へ記すあの歌。 - - ああ云う場面が母を知らない少年の胸に訴える力は、その境遇の人でなければ恐らく想像も及ぶまい。自分は子供ながらも、「我が住む森に帰らん」と云う句、「我が思う思う心のうちは白菊岩隠れ鶯がくれ、篠の細道掻き分け行けば」などと云う唄のふしのうちに、色とりどりの秋の小径を森の古巢へ走って行く一匹の白狐の後影を認め、その跡を慕うて追いかける童子の身の上を自分に引きくらべて、ひとしお母恋いしさの思いに責められたのであろう。そう云えば、信田の森は大阪の近くにあるせいが、

昔から葛の葉を唄った童謡が家庭の遊戯と結び着いて幾種類が行われているが、自分も二つばかり覚えているのがある。その一つは、

釣ろうよ、釣ろうよ 信田の森の 狐どんを釣ろうよ

と唄いながら、一人が狐になり、二人が獵人になって輪を作った紐の両端を持って遊ぶ狐釣りの遊戯である。東京の家庭にもこれに似た遊戯があるが、唄の文句も節廻しも大阪のとはやや違う。それに遊戯する者も、東京ではすわったままだけれども、大阪では普通立ってやるので、狐になった者が、唄につれておどけた狐の身振をしながら次第に輪の側へ近づいて来るのが、 - - たまたまそれが艶な町娘や若い嫁であったりすると、殊に可愛い。少年の時、正月の晩などに親戚の家へ招かれてそんな遊びをした折に、あるあどけない若女房でその狐の身振が優れて上手な美しい人があったのを、今に自分は忘れずにいるくらいである。

**初音の鼓** 自分はいつも、もしあの芝居のように自分の母が狐であってくれたらばと思って、どんなに<sup>あべ</sup>安倍の童子を羨んだか知れない。なぜなら母が人間であったら、もうこの世で会える望みはないけれども、狐が人間に化けたのであるなら、いつか再び母の姿を仮りて現れない限りもない。母のない子供があのだ芝居を見れば、きっと誰でもそんな感じを抱くであろう。が、千本桜の道行になると、母 - - 狐 - - 美女 - - 恋人 - - と云う連想がもっと密接である。ここでは親も狐、子も狐であって、しかも静と忠信狐とは主従のごとく書いてありながら、やはり見た眼は恋人同士の道行と映ずるように<sup>えい</sup>工<sup>しく</sup>まれている。そのせいか自分は最もこの舞踏劇を見ることを好んだ。そして自分を忠信狐になぞらえ、親狐の皮で張られた鼓の音に惹かされて、吉野山の花の雲を分けつつ静御前の跡を慕って行く身の上を想像した。自分はせめて舞を習って、温習会の舞台の上でも忠信になりたいと、そんなことを考えたほどであった。

「だがそれだけではないんだよ」と、津村はそこまで語って来て、早や暮れかかって来た対岸の菜摘の里の森影を眺めながら、

「自分は今度、ほんとうに初音の鼓に惹き寄せられてこの吉野まで来たようなものなんだよ」と、そう云って、そのぼんちらしい人の好い眼もとに、何か私には意味の分らない笑いを浮かべた。

**母** とにかくそう云う風にしてでも津村が知り得た事柄は、母に関する二十年来の彼の疑問を解くに足りた。母が大阪へやられたのは、たしか慶応頃だったと婆さんは云うのだけれども、ことし六十七になる婆さんが十四五歳、母が十一二歳の時だったそうであるから、明治以後であることは云うまでもない。それゆえ母はわずか二三年、多くも四年ほど新町に奉公しただけで、じきに津村家へ嫁いだことになる。おりと婆さんの口吻から察するのに、昆布の家は当時窮迫こそしていたものの、相当に名聞を重んずる旧家で、そんな所へ娘を勤めに出したこと

をなるべく隠していたのであろう。それで娘が奉公中はもちろんのこと、立派な家の嫁になった後までも、一つには娘の恥一つには自分たちの恥とあって、あまり行き来をしなかったのであろう。また、実際にその頃の色里の勤め奉公は、芸妓、遊女、茶屋女、その他何であるにしろ、いったん身売りの証文に判をついた以上、きれいに親許と縁を切るのが習慣であり、その後の娘はいわゆる「喰焼(くいやき)奉公人」として、どう云う風に成り行こうとも、実家はそれに係り合う権利がなかったでもあろう。しかし婆さんのおぼろげな記憶によると、妹が津村家へ縁づいてから、彼女の母は一度か二度、大阪へ会いに行ったことがあるらしく、今では大家の御料人様に出世した結構ずくめの娘の身の上を驚異をもって語っていた折があった。そして彼女にも是非大阪へ出て来るようにと言づてを聞いたけれども、そんな所へ見すばらしい姿で上れるはずもなし、妹の方もあれなり故郷を訪れたことがなかったので、彼女はついぞ成人してからの妹と云うものを知らずにいるうち、やがてその旦那様が死に、妹が死に、彼女の方の両親も死に、もうそれからはなおさら津村家との交通が絶えてしまった。

**お和佐さん** 「で、今度の旅行の目的と云うのは？ - - 済んだのかい」  
二人はあたりが薄暗くなるのも忘れて、その岩の上に休んでいたが、津村の長い物語が一段落へ来た時に、私が尋ねた。

「いや、今の話しには、まだちょっと云い残したことがあるんだよ。 - - 」

私は津村がそう云いながら微かに顔を赤くしたのを、悟ることが出来た。

「 - - その、始めて伯母の家の垣根の外に立った時に、中で紙をすいていた十七八の娘があったと云っただろう？」

「ふむ」

「その娘と云うのはね、実はもう一人の伯母、 - - 亡くなったおえい婆さんの孫なんだそうさ。それがちょうどあの時分昆布の家へ手伝いに来ていたんだ」

私の推察した通り、津村の声は次第に極まり悪そうな調子になっていた。

「さっきも云ったように、その女の児は丸出しの田舎娘で決して美人でも何でもない。あの寒中にそんな水仕事をするんだから、手足も無細工で、荒れ放題に荒れている。けれども僕は、大方あの手紙の文句、『ひびあかぎれに指のさきちぎれるようにて』と云う - - あれに暗示を受けたせいかな、最初にひと眼水の中に漬かっている赤い手を見た時から、妙にその娘が気に入ったんだ。それに、そう云えばそう、どこか面ざしが写真で見る母の顔に共通なところがある。育ちが育ちだから、女中タイプなのは仕方がないが、研きようによったらもっと母らしくなるかも知れない」

「なるほど、ではそれが君の初音の鼓か」

「ああ、そうなんだよ。僕はその娘を嫁に貰いたいと思うんだが - - 」

お和佐と云うのが、その娘の名であった。

